

Willi Weismann und Die Blendung von Jochen Meyer
ヨッヘン・マイアー「ヴィリィ・ヴァイスマンと眩暈」

ウィーンの Herbert Reichner のもとで 1935 年 10 月---Alfred Kubin の表紙絵を持つ---処女作長編小説 Die Blendung が出版された。これはオーストリアのアヴァンギャルドサークル内でセンセーションを巻き起こしたが、当時の支配的政治状況では、それ以上の影響を及ぼすことはできなかった。

著者エリアス・カネッティは 1939 年初頭以来、亡命先のロンドンで生活していた。戦後、若いドイツの出版者にとって、行方不明者と接触するのは、確かに容易なことではなかった。出版者ヴィリィ・ヴァイスマンにとって、この場合も---ヘルマン・ブロッホの場合のように---1936 年の経験が役だった。ミュールハイムからヘルバート・ブルクミュラーのために、ドイツで「銀のボート」(Silberboot)の不法な活動の組織を試みたときのように。1936 年 7 月、エルンスト・シェーンヴィーゼが、カネッティの小説に関するエルンスト・ヴァルディンガーの論文を、「銀のボート」に公刊していた。狂人たちの人間喜劇、Die Blendung は「重要な実験小説」であり「バルザックの意味における小説シリーズの初巻」に当たると紹介し、「全世界の悲惨を、個人の妄想的極端化において眺め、人間的悲嘆をこの観点から徹底的に治癒しようとしている」と。シェーンヴィーゼも戦後これに言及し、1946 年早春、「銀のボート年鑑」を公刊した。それには、ヴァルディンガーの古い論文と、1932 年ベルリンのフィッシャー書店による舞台原稿からコピーされたドラマ、カネッティの『結婚』(Hochzeit)序幕の一場面が含まれていた。そのほか 1946 年 4 月、新しい「銀のボート」2 号には、この序幕の別の場面が掲載された。1946 年 4 月以来発行されていたヴァイスマンの月刊誌「渡し船」は、シェーンヴィーゼの「銀のボート」と共同事業で結びついていたが、ヴァルトジンガーの論文とカネッティの例の一場面を、1946 年秋「渡し船」年鑑で、二番目の場面を、1947 年 2 月ヴァイスマンの雑誌で再印刷した。1946 年ヴァルディンガーの詩集「この時代のための音楽」は、出版社の最初の書籍だった。彼のカネッティ論文が、これまでまだ未印刷の小説、多くの巻にわたる「人間喜劇」への視線を開いたということは、出版社にとって、作者との結びつきこそ、より展望豊かなものをもたらすに違いなかった。1947 年晩夏、ヴァイスマンはカネッティに直接問い合わせた。

「あちこち探し回り、漸くあなたの住所がわかりました。あなたの本 Die Blendung が出版されたとき、私はすでに大きな印象を受けました。私がどれほど高くあなたの仕事を評価しているかは、あなたのドラマ『結婚』の一場面を、「渡し船」に印刷したことから推察していただけるでしょう。私はシェーンヴィーゼ氏からそれを受け取り、報酬のことも彼との勘定は済んでいます(...)

あなたと結びつきを得た今、私は喜びに耐えません。しかし、そうであ

ればあるほど、更にあなたのお仕事を「渡し船」で公刊なさる機会をしばしば持ちたいと願っています。

私の知るかぎり、ライヒナー出版社はもう存在しません。あなたの本 *Die Blendung* が、まだ思い通りにいかないのであれば、私が喜んでお引き受け致します。しかし、私にとりわけ興味あるのは、あなたが恐らく計画されていた作品の更なる仕事が、すでにかなり進捗していて、近い内、それら数巻の出版が計算できるかどうかということです。

私の出版社の目録を同封します。私がこの間ハンス・ヘニー・ヤーン的全詩作品を引き受けたことは、あなたの興味を引くでしょう。彼の小説「ペルディア」は、来年初頭に出版されるでしょう。そのほかヘンリー・ミラーとも交渉しています(...)」(Weismann an Canetti, 1947年9月20日)。

夫に代わって、まずヴェネチア・カネッティが答えた。彼にとって重要なのは、*Die Blendung* を未完のドラマ『結婚』や『虚栄の喜劇』と同時出版することです。ドイツのロンドン空爆を仄めかしながら、彼女は最初の戯曲をこう特徴づけた。「結婚は、>電撃作戦<下、ロンドンですと後に起きた出来事の一予感です。結婚招待客の頭上で家が倒壊します。」*Die Blendung* に続く本について、彼女はこう書いた。「新しい小説に関して、カネッティは残念ながら、ほかのすべての作家たちと逆の特性を持っていて、何かを犠牲にすることは決して願っていません。すべての原稿がまだ印刷されず私たちの手元にあり、イギリスの出版社もドイツの出版社も、そのいずれかの原稿出版を彼に持ちかけてはいません。」(1947年11月12日)。ヴァイスマンは願いを新たに述べたが、次のようにも白状した。「彼の本をドイツで出版する最大の困難な問題は、たぶん外国為替支払いが不可能だという点にあるでしょう。」(11月17日)。ちょうど、かなり長期の旅行から戻ってきた詩人は、次のように答えた。

「何はともあれ、私の作品における *Die Blendung* の位置について、私はあなたに説明しなければなりません。それはもはや、並列的小説シリーズの部分とは考えられていません。自立した、全くそれ自体で閉じた作品だと、私は見えています。アングロサクソンの世界では、そういうものとして受け取られていますし、ここではジョイスやカフカと並んで、真面目に批評され議論されています。あなたが出版に関心をお持ちの書物を引き受けていただくには、私は、純粹に即物的な情報をあなたにお知らせしなければならぬからこそ、そのことをお知らせしているにすぎません。(…) フランスでは大部数発行の出版が準備されています。そこでは、実存主義的でシュールレアリズム的原理の新たな融合と、フランス文学で漸く後々表現を見いだす、先取りされた多くのものを見る傾向になります。あなたに申し上げる必要はないと思いますが、私はこれらのグループの誰からも影響を受けていません。私は私の形式にまったく独自に到達しました。

この間、私が二つ、ほかの小説を書いたのは本当です。(…) しかし、そ

の二つに、私はまだ必ずしも満足していません。ですから、イギリスとアメリカの出版は予め拒絶しました。出版できるまでには、私はまだ約2年間、それについて熟慮しなければならないと考えています。ですから、権利交渉については早すぎるように思われます。

これに反して、二つの戯曲『結婚』と『虚栄の喜劇』を、私はすでに完了した妥当な作品と見なしています。これは、私にとって Die Blendung より決して重要ではありません。それらは、少なからぬ点でより集中したより鋭い物には思えますが。それらのイギリスやフランスでの出版について、私は今まで同意しておりません。まず最初は、それが書かれた言語で出版されることが、私の願いだからです。

私があなたにお聞きしたいことは、この3つの作品で、どの程度、またどのようなシリーズで、どれほどの部数出版を考えておいでなのかということです。(…)私のヴィーン時代に命を吹き込まれたままの、これらの作品は、すべて一緒の物です。3つの作品がすべて可能な限り、間もなく、相次いで出版されることを私は強く望んでいます。

3つの作品をすべて一緒に出版するために、あなたの提案が私に好都合だと思える場合、3年間の権利をあなたにお任せする準備があります。その時は、この期限が過ぎた後、新たな協定に達するでしょう。状況もその時までには、自ずと明らかになっているかも知れません。私は公刊物が少ないので、他の人より多くの報酬をあてにしています。ドイツでの受け取りが予め閉ざされているということは、そこで出版する決心が、私には容易くありません。」(Canetti an Weismann, ロンドン, 1947年12月10日)

カネッティはこう述べて、ヴァイスマンの販売地域の照会（ドイツ全土か、それとも西の3占領地区だけか）、さらにオーストリアでの平行出版、あるいは版權出版にシェーンヴィーゼとの共同作業の可能性を問い合わせ、出版社の努力と次のすべての協定に対する枠組みを示した。出版者のヴァイスマンは、返信で「来年中には、ヘルマン・ブロッホから精神史的作品受領の見込みが確かなこと」（12月18日）に注目させることができた。ブロッホとヴァイスマン出版社の関係は、もちろん、まだすべてが明確ではなかった。ヴァイスマン自身がイニシアティブを取り、あの短編小説巻本、ブロッホが半ば同意して待ち受けていた、巻本の組版を仕上げねばならなかった。それから漸くゲラ刷りを見ながら、前例なき「推敲」過程を経て、短編小説「罪なき人々」が出来上がった。これに反して、カネッティとヴァイスマン出版社の関係は、すでに幾度かの手紙の後、すべてが明らかだった。問題になっている作品の推敲は必要なかった。出版契約の細目がすぐに明確にされた（1948年2月締結）。少なからぬ困難さも、当初から明らかだった。すなわち、長期にわたり不確かな外貨振り替え、全く信頼の置けぬ手形への割り振り、また間違いなく、出版社や書籍取次販売業者にとって、まず破滅的結果を伴う「脅威的」通貨改革等である。

「出版期限の正確な取り決めは、絶対に不可能です。ドイツにおける事情から、取り決め自体が不合理でしょう。(…) 電力供給停止、機械装置の故障（その大部分が間違いなく修復できません）、企業活動と疎遠な社員の労働力投入などが、予測できない停滞を自ずと引き起こすのはよくあります。もし私が、起こりうるこれらの障害をあなたに指摘しないなら、私は無責任になるでしょう。しかし、あなたが確信なさってもいいのは、あなたの書物を、まだ今年中に出版することが、私の最重要事だということです。」(Weismann an Canetti 1948年1月28日)

1948年中旬、Die Blendung が出版されることになった。二つのドラマもそれぞれ二ヶ月の間隔で続くことになった。結局その出版は、小説の後、少なくとも更にカネッティのドラマひとつを公刊するために、ブロッホの本の遅滞がちな出版の場合とほぼ同じ時間を要した。

著者と出版社間の文通で決定的な関与をしたのは、1947年12月以来、ヴァイスマンの編集顧問、ルードルフ・ハルトゥング(Rudolf Hartung)だった。彼に宛てた最初の手紙で、カネッティは個々の契約条項の論議に、次のように付け加えた。

「最後に、少し個人的なことを書かせていただきますが、この間、あなたは小説を受け取られたでしょうし、あなたの期待が大して裏切られることはなかったことを願っています。あなたの個人的印象を、お聞かせ願えればと考えています。私たちの文通が、純粹に商売上のものに留まらないためにも。またあなたと少しは知り合いになるためにも。」(Canetti an Hartung, ロンドン、1948年1月18日)

著者にとって、ここでは親しい結びの言葉以上のものが問題だったことは、同日、出版者宛てのカネッティの手紙の付随的所感によって知られる。「ヴァルディンガーの Die Blendung の解釈は、非常に親切なものですが、人を誤らせます。彼が戦前 Die Blendung について書いた論文は、完全に間違っていると、私には思われます。」--- それに反して、ルードルフ・ハルトゥングの返答は、カネッティのあらゆる期待を凌ぐものだった。エッセイ形式で、ハルトゥングはそれを1月24日に送付した。「書いている間中(...)あなたの小説の世界へ入り込み、時々、その意味をこの手に掴むことが、まるで私に可能だったような印象を何度となく抱きました。」ハルトゥングの Die Blendung 「考察」は「寓話と人物」(Fabel und Gestalt)の表題で「文学評論」6月号に掲載され(通貨改革で1948年7月、漸く発送されたが)、考察の出口を、「因習的な寓話に対する」真に同時代的な芸術や文学の「全体的不満足」に求めた。「我々は、伝統主義者が指摘する我々の盲目性や我々の不能力を、彼らの規範に任せておこう。結局、満足しない者たちのなかで、それを感じ取り、気分やスノビズムからでなく、満足を乗り越えた者だけが語り得るのである。」因習的小説じみた世界描写という寓話に対して、そのように公言された現代の物語作家の「盲目性」、ハルトゥングは Die Blendung を、この盲目性の必然的な帰結として解釈した。だから、カネッティの小説は Die Blendung という表題に

なっているのである。

「エリアス・カネッティのこの小説では、正常な人々の合意に応じるような、あの共通存在空間としての世界は、溶暗化(abblenden)されている。西洋的世界感情の根本的動揺が、人間が行動し語り合いつつ真に出会うことの出来る、同一的存在空間という寓話を完膚無きまでに破壊したのである。しかしこのように粉碎された世界における人生は、どのような観点を獲得したのか？

カネッティの人物たちの独特な高揚された含蓄性は、徹頭徹尾、この問に対する答えとして把握されねばならない。決定的な洞察は、人物の含蓄性がここでは、例えばゲーテの意味における人格の完全な展開とは、根本的に違うものを意味していることである。カネッティの人物たちは鋭く輪郭づけられ、意味深長である。彼らが完全に成長を遂げた個人だからではなく、一世界の没落と同時に、その基準も消失したからである。粉碎された世界では、必然的に価値基準の喪失が支配するからである。(その際、「人物」という概念が、周囲の世界に対し境界を設けている内面空間という観念は、この人物概念と結びつくが、まだそこで、つまり周囲の世界の代わりに妄想構成物の投影が出現してくるところで、適用できるかどうかという疑問は留保される。)(...)

小説の筋書きは内面的必然性を持って、この主人公の「実存的」状況から結果的に派生する。ある程度急変的な、生きられたことのない生活が、外部から、またその最も否定的な形式でペーター・キーンに歩み寄ってくる。そして彼を汚らわしい泡立ちで水浸しにする。彼は家政婦のテレゼと結婚する。一度借用したぼろぼろの書物を大切に扱おうとして、彼女が白いキッド革の手袋でそれを読んだ印象に圧倒されたのである。彼はこの強欲的な普通の女によって、次第次第に彼の部屋から、最後には住居から追い払われる。貧民街の手癖悪い輩と共同事業を行い、弟である精神科医によって、再び自分の住居に居場所を定めるが、図書館に火を放ち、蔵書と共に炎上する...

しかしながらこの短い概略は、ただ寓話の外面的局面にだけ当てはまる。その内面的経過は、次の点に見るべきであろう。即ち、筋書きの進展に伴い、なるほど本来極端だが、やはりなおその意味合いにおいて、後々是認できる生活現実の溶暗化(Abblendung)が、恐ろしいまでの確かな徹底性によって、完全な失明状態(Verblendung)まで高められるという点である。当初ただコミュニケーションを喪失した、ペーター・キーンの実存という織物の、奇妙な一本の糸のように思っていたものが、復讐する生活の殺到の下で、もはや繯れを解きほぐせぬ分裂病的紡ぎものにまで凝縮される。(...)

このカネッティの最初の偉大な小説の特異な芸術的性質は、上述した溶暗化を通じて作用を及ぼす、人物たちの意味深長さにある。その世界は再び確信的で、迫力ある方法によって記述可能となった。なぜなら、この作者の急進的な勇気が、もはや「語りかける」ことのない、手渡さ

れた世界の幻想から断固として別れを告げ、記述に適した「記号」の下で、大胆な選択を企てたからである。従って先験的に、あのさまさまの作品が持つ、深い差し障りのなさが避けられた。それら作品は、今日まさしく時効となった熱意のおかげで、感情や現実的に見られた細部をすべて揃えている。他方カネッティは、ジョイスによって発展させられた「内面的独白」を個人的に変化させることで、文体上の方法を作り上げた。内面的観相と、彼の人物たちの一回限りの世界眺望を再現するためである。」(Literarische Revue 3号、1948年、341-347ページから。引用箇所は342-344ページ)

ハルトゥングは精神科医ジョルジュ・キーンの信念を、小説に内在する自己解釈の切っ掛けとして読むことを試みたが、次のような結論に達した。「Die Blendungの世界が、事実そのような浪漫的憧憬にその存在を負っているのであれば(>純文学<に飽き飽きし、狂人たちから>学び、狂人を治療しない<決意を抱く者の憧憬だが)、その創造者は彼の愛自身の対象物によって、手ひどい幻滅を蒙ったことがあるに違いなかろう。というのも、対象となる狂気が素晴らしいのは稀だから。」(345ページ)。解釈者はそれ故、そのような翻訳の許容度を、すぐ再び制限した。「しかし小説のある人物の意見を、著者の意見とみることは、許されるだろうか？」小説の芸術的形式という内面的必然性に対して、ハルトゥングは含蓄ある公式を発見した。「グロテスクなもの、あの現実的なものと非現実的なものの独特な結びつき、それがカネッティの世界の本来的「要素」をあらわしているが、これこそ唯一可能な生の現象形式であり、その生は常軌を逸した立場で意味が認められる。」(347ページ)。--- カネッティの返事はこうだった。

「あなたが数週間前、私に送付してくださった論文に感謝したいと思います。返事が遅くなりましたのは、私が論文を読んで特別嬉しかった所為にしたいところです。何か私に身近になればなるほど、また重要であればあるほど、ますます時間をかけなければならなくなりますし、どのような形式的、あるいは時宜にかなった返事も、ますます意に添わなくなります。あなたはDie Blendungの精神のすぐ側まで近づいたと思います、驚くべき短期間で。あなたが作品解明のために、精神科医の思想を引き合いに出す思いやりと慎重さは、全く心地よいものです。例えばイギリスの「賢明で要求多い」批評は、作者が精神科医の口を借りて話すことを、通常、約束事と見なしているように思われます。この混乱ぶりに寄与したかもしれないのは、私が実際、私の考えの幾つかをジョルジュ・キーンから借用したことです。しかし、多くのほかの考えのほんの僅かです。ですからそれはすでに、もはや私の考えではありません。私の見る限り、「あなたは」医者狂人に対する浪漫的感情と、小説における実際の描写間の対立に目をとめた最初の批評家です。人は、この対立は天も人も共に許さぬことだと思いたいかもしれませんが。何はともあれ、この深みに達した者なら、素朴極まりない読者であっても、精神の

病的理解について何事かを学んだことでしょう。ジョルジュの使命の難破は、彼がその方法ですべての者を治療出来るが、彼のすぐ側に立つ、まさしく兄だけは治療出来なかったということで、しばしば説明されました。表面的な心理学的意味では、それも正しいのです。しかしこの不能力は、兄との対立の中で成立した彼の法則にも表現されていることは、誰からも考慮されませんでした。なんととっても、その法則の中でお互いの特徴づけることになる、二人の兄弟の長い対話がそこには存在するのですから。」

「あなたの」公式化の少なからぬものが、特別うまくいっています。実存的なもの小説の美学的なものとの関係が、正確に把握されています。「狂気というもの」をどんなに個々に「除去」しても、それは、恐らく限定された意味を含むことになるのを、確かにあなたは見落とされませんでした。小説の「向こう側で」、例えばボッシュの地獄の場面におけるように。そのことを語るのは、論文の美的な直線を台無しにしたでしょう。あなたは間違いなく小説を全体として扱っていらっしゃいます。その隠れた個々の意図すべてを指摘するには、一冊の書物さえ要求されるでしょう。あなたが論文でそのような誘惑に屈服なさらなかったことが、私には嬉しく、感謝に堪えません。」(Canetti an Rudolf Hartung, ロンドン、1948年2月23日)

カネッティは、彼と友人だった抒情詩人フランツ・ベールマン・シュタイナー(Franz Baermann Steiner)(1909-1952)を強く推薦し、手紙を終えた。彼は1936年以來イギリスに亡命し、1939年からオックスフォードで文化人類学者として生活していた。「彼の初期には、ヘルダーリンの影響が中国人の影響と交錯しあっています。この統合は、彼がほとんどフランス語を読まず、ボードレールや後期フランスサンボリストによって踏み開かれた小道を直接歩いていないからこそ、私には特別面白く思えます。後にイギリスで修養を積み、彼はイギリス抒情詩の完璧な識者になりました。彼の作品上のその影響が、あまりに正統的で複雑な性質なので、容易にそれを認識できません。私は他のどこにも、エリオットや後期イエーツの作品が、ドイツの媒介物の中でこれほど深い根を下ろしたことはないと信じています。」(カネッティの手紙に対する返事で、ハルトウングは「文学評論」とシュタイナーの結びつきが既に存在することを指摘出来た。後にヴァイスマン出版社は、シュタイナーの選集版「バビロンの壁龕で」を準備した。)出版社の編集顧問が詩人に及ぼした印象が、決断を促した。ハルトウング宛の手紙の二日後、1948年2月25日、カネッティは署名済みの出版契約書をヴァイスマンに送り返した。ドラマ原稿が3月11日に続いた。既に2月6日、カネッティはドラマについて出版者に告げていた。「私はこのドラマで、私たちと私たちの時代を含む、新しい劇的形式の基礎を作り上げたいと思っています。」心理学の仕事で学位を得ていたハルトウングは、『結婚』(Hochzeit)を読み終えカネッティに書いた。

「内容、過程、筋立てが赤裸々になることはありませんでした。私が言いたいのは、それらは作者の創造的過程の直接的記録だということです。ノイローゼとは別の平面上にいるような、創造的症候群です（ここにはカフカとの本質的類似性があるのではないのでしょうか?）。(...)

『結婚』の内容的なものを --- 今では私がいつそう深く理解していると信じている Die Blendung も --- 現実についての言説として読むことは出来ませんし、現実の代替物として理解することも出来ません。いずれにしろ、因習的な意味合いでは出来ません。何よりもまず、あなたの作品は内容と行動の関係についての言説のように思われますし、記録された創造過程として理解されねばならないように見えます。(芸術作品に関する私の観念に、今日非常に適うものです。つまり今日、必然的にそれ自身の存在について、その存在と関連しながら、創造についての言説が流入している芸術作品です。)」(Rudolf Hartung an Canetti, ミュンヘン、1948年4月2日)

ハルトウングの手紙は、全体として手数のかかる理解過程を映し出している。そこには、16年を経た戯曲に対する苛立ちや驚愕が認められる。この作品は更にずっと後、1965年の初演でスキャンダルを巻き起こした。惨めな競売時代(Hundhammer-Ära)のバイエルンの文化官僚との経験が、出版者を用心深くさせた。彼は腹藏なく次のように告白した。

「ドラマ『虚栄の喜劇』は直ちに組み版に回ります。それに反し『結婚』には大層躊躇っています。(...) ですから、私はそのドラマに解説的論文を付け加えることを提案したいのですが。(...) しかしいずれにせよ、『結婚』は小説の後に初めて出版したいのです。ドイツの読者は、もうこのような種類のテーマ設定には慣れていませんし、多分、ほとんど理解できぬ反応をするでしょう。私たちは彼らが近づくことができるように、何か軽減してやらねばなりません。」(Weismann an Canetti, ミュンヘン、1948年4月2日)

作者にはその準備が出来ていた。「『結婚』のために、私はあとがきを計画しています。ドラマについて、私の理解を明らかにするこの機会は、非常に望ましいものです」(6月9日)。---ヴァイスマンはその間、まったく別の困難と格闘しなければならなかった。1948年6月20日の通貨改革が、「文芸評論」の予約者数を破滅的に後退させた。「私どもは今やことのほか、注意深く計画を立てねばなりません。目下、完全に現金の資本がないのですから」(7月10日)。Die Blendung は、テキストがちょうどページに組み込まれていたが、印刷を躊躇することは許されなかった。しかし『虚栄の喜劇』の組み版は後回しにされた。それにも拘わらず、まだクリスマス前には発行の予定だった。「私たちは小説見本ページを、私の以前のエッセイと一緒に、宣伝パンフレットとして書籍取次店に出させました。(5000部)発行の半分には、既に前注文があります」とハルトウングは11月3日に告げた。まず最初、半クロス装の亜麻布が手に入らなかったためと、印刷所の仕事が入念でなかったため(「私たちは刷本を

手で折り畳ませましたし、その一部を破棄しなければならないことさえありました」12月20日)、結局、発行部数の一部だけが、まだクリスマス前に引き渡された。「現在の状況下で、本当に素晴らしい趣味のよい出版に、私たちはこの上なく喜んでいきます」(Venetia Canetti an Weismann, 1949年1月17日)。間もなくすると既に当然ながら、通貨改革後の経済的発展が、相変わらず楽観的な発行所の売り上げ期待を、無に帰せしめたことが明らかになった。

「Die Blendung はクリスマスに非常に多くの注文を受けましたが、小売り書店の売り上げは、期待には遙かに及びませんでした。多くの小売り書店が支払い不能に陥っており、クリスマス前に既に売り切っていた書籍の大部分を、多大の損失から守るために、再び買い戻さざるを得ませんでした。この理由から、私たちは再び、現状では販売出来ない Die Blendung の多大な部分的在庫を抱えています。そうではありますが、一般的に言って、私はこれからの展開を全然心配していません。つまり、私の出版社に二つ目の出版社、「マガジン出版」を合併させました。これは、非常に要求高いヴァイスマン出版社の金融に役立つでしょう。この実験は今日なら正しいと証明されるでしょうし、実際、当面の危機を耐え抜ける状態になっています。(...)

私たちは今や、ドイツのためにライン出版の代行も引き受けました。ですから、ジェームス・ジョイスやヘルマン・ブロッホもドイツに引き渡します。これで、出版社の顔が誤解のない明らかなものになりました。私の確信では、これが売り上げの面でも、秋までよい作用を及ぼすでしょう。この関連であなたの興味を引くのは、ヘルマン・ブロッホの短編小説が私の出版社で発行され、ロベルト・ムジールの全作品も、恐らく私が出版するようになることでしょう。」(Weismann an Canetti, ミュンヘン、1949年4月26日)

そのような作者たちの名前の背後で(ヴァイスマンがカネッティやブロッホ宛の手紙で、再三再四引き合いに出したハンス・ヘニー・ヤーンの名前が更に付け加えられるだろう)、--- そのような名前の背後で、新参者とアウトサイダーの熱狂で、前半世紀の物語作家前衛の、伝統を作り出す力に賭けた出版社の構想が見えてくる。その実験はまさしく、この文学的近代という伝統の綱が、ヒットラーの年月と戦争と戦後によって生き埋めにされたとき、更により一層無鉄砲な姿で現われるに違いない。これらの作者にとって、躊躇しつつも十分に新しい影響段階が始まり、場合によっては、近代の古典主義者に対する規範化のようなものが生じる迄、更に10年を要することになったが、このことは1950年には認識されなかった。(ヴィリィ・ヴァイスマン出版も、この展開を待ち受ける時間は残されていなかった。) --- カネッティは返答した。

「あなたがブロッホとムジールの出版を考えておられるのは、大変嬉しいことです。私自身の文学的旅程は確かに全々異なった道ですが、人が自分の姿を見せることの出来る交わりがあります。ブロッホは私の最

も古い、最良の友人の一人です。」(Canetti an Weismann, ロンドン、1949年5月12日)

1949年が過ぎ去った。本来、既に1948年に計画されていた『虚栄の喜劇』の印刷でさえ、始めることはできなかった。木繊維の含まれぬ紙は容易に調達できなかった。「しかし売るのが難しい本には、良質の紙が絶対必要です。近い将来、木繊維を含む紙の本は、もはや購入されないのを計算しなければならないのですから」と、出版者は1949年12月16日、申し開きの説明をした。ルードルフ・ハルトゥングは1950年2月3日、最後の校正刷り送付の際、「『喜劇』が印刷所から印刷所への真のオデッセイアを経験し」、最後には更に東地区まで達したことを指摘した。

ヴァイスマンは補足した。

「私は去年ライプチヒのハーグ・ドルグリンに、組み版と印刷の原稿を渡しました。(…) その会社は委託された仕事も引き受けましたが、その地で通用する取り決めの理由から、当局の許可が出て漸く実行することが出来ました。私はその本を直ちに、これに関する所轄のベルリン文化顧問にも提出しました。私は絶えず返還請求したのに、何の知らせも受け取りませんでした。個人的に訪問したとき初めて、文化顧問が同意していないことを、私は知らねばなりませんでした。ですから、私はただその本の活字を組ませ、母型を取らせることは出来たでしょう。しかしそれは、更に時間の損失を意味することになったでしょう。そこで手短かに決断して、私に原稿を引き渡させ、すぐこの印刷所に依頼しました。」(Weismann an Canetti, ミュンヘン、1950年2月6日)

同じ手紙で出版社は、書物を「東地区」で発行するこの試みを、通貨改革後の西ドイツ書籍市場の状況と関連させて書き記した。

「少し前から、大衆の要求は、書物装丁の観点で、大変高くなりました。ですから悪い紙の本は、実際売れなくなりました。現在では、大衆は書物を買うのではなく、紙と表紙を買うのです。それは出版社に、部分的ですが当然破滅的影響を及ぼします。というのもあらゆる在庫品は、既に以前の経験によると、販売に数年要しますが、今ではきわめて短期間に価値が下がるからです。私はこれまで、悪い装丁の在庫品を原価以下で売れることを思いとどまってきました。出版社の名声は、それで余りにも容易く損なわれるからです。少なくとも売れぬ在庫品から少しは自由になろうと、私は書物の一部を東地区に売り払いました。そのため当然ながら、私たちのこちらの通貨に対し、非常に悪い関係の東マルクをただ受け取ったにすぎません。その上、非合法ではあれ、この東のお金の外貨振替の可能性もありません。そのことは、この関連で生じた報酬も当然ながら、まずは東のお金で自由に使えるにすぎないことを意味します。

ところで数ヶ月前から、私はこの地で得たかなりの額の銀行預金を、出版に使おうと東地区の当局と交渉しています。ただこれまで、成果は僅かにすぎませんが。ですから、このお金が使えるようになるまでには、

まだかなりの期間かかるでしょう。東地区は現在あなたの本を「墮落的」だと拒絶しましたから、私にはこの可能性ももはやありません。ですから既に今日の地点で、まだ余っている残りの在庫本を原価以下で売るか、あるいは小売値を大幅に下げるかを、どうか了解して頂きたいと思います。財政的に何らかの好転が見込めれば、出来るだけ早く、両者の利益になるよう、Die Blendung の新版を出したいと思います。その時には実際、素晴らしい装丁で出版されねばならないのは当然です。」

ブロッホの新しい小説（「今春に」と相変わらずヴァイスマンは信じていた）の知らせと --- 無駄に終わった --- 「ロベルト・ムジールの文庫本」（「秋に」）への期待が、喜ばしい展望に話を向けた。

「それによって、出版社は多分精神的な顔を手に入れるでしょう。そうなれば、ゆっくりとではあれ、私たちの作家も本当にその地歩を占めることに成功するのを、私は強く願っています。

「文学的前衛」の観点で、私たちは新しい企画を準備しており、それには4人の名前ブロッホ、カネッティ、ヤーン、ムジールが含まれます。それによって出版社が引き受けるものは、確かに大きな冒険ですが、そういった出版の精神的重さこそが、永続的で、是非とも必要な注目度を出版社に付与するというのを、私は計算しています。」(Weismann an Canetti, ミュンヘン、1950年2月6日)

カネッティは2月20日、『虚栄の喜劇』の最初の校正をハルトウングに送り返し、欠けていた登場人物表にクレームを付けたが、それは第一部の構成要素として、「登場順に」名前を挙げらるべきものだった。「これは私には重要です。なぜなら、第一部はそのほかの機能と並んで、一種の人物紹介としても役立つことになりまして、彼らは皆、私にとって原理的に同じく重要だからです。というのも、すべての者が同一の主人公である鏡像>私<に関係しているのですから。」 --- 詩人には印刷が「特別素晴らしい」気に入るものだった。しかし、出来上がった本を「数週間で実際手にするだろう」という期待は、又しても欺かれた。大きく変動した校正終了後、3月末に印刷に附されたが、なお長い間、出版されなかった。5月末、著者の電報照会によって、新たな躊躇いが明らかになった。ハルトウングは5月24日、会社の財政的危機を仄めかした。「ところで数週間たてば、私はヴァイスマン出版社に首を切られるでしょうし、その時は、自由な作家として、何とかやっていくことを試みなければなりません。新しい経験です！」

6月9日出版社は、今や印刷はされたが、まだ厚紙装丁のない作品の見本刷りをついに送付した。「文庫版本の店頭価格は3マルク50です。もちろん、全く恣意的に決めた値段ですが。何と云っても、製造原価の埋め合わせが達成できないのですから。(...) 発行部数は勿論、とても少ないものです。私たちは600部印刷しました。最初の一回目、その一部だけ装丁させます。」7月中旬、最初の部数が引き渡された。8月8日ヴァイスマンは作者に伝えた。「昨年度の相次ぐ倒産の結果、出版社が耐えねば

ならなかった多大の損失によって、私が今や支払いを停止しなければならぬ困難な状況に追い込まれました。」彼は裁判外の和解を提案した。現存の要求額 2150 マルクの 40% を、15ヶ月分割払いなら支払い可能というものだった。「もしあなたが更に書物を必要とする可能性があれば、当然、あなたの要求額はその本で支払われるでしょう。」カネッティは既に前もって『喜劇』の 100 部を求めていた。ヴァイスマンは 8 月 21 日、カネッティに書いた。「これらの部数を買っていただくのは、当然ながら、私にとって大助かりです。(…) 私たちはそのほかに、新聞社へ回す部数を更に装丁させます。何はともあれ、カネッティをドイツで確かなものにするため、何もしないままであってはなりません。もちろん今のところ、私は小さくなって座視していなければなりませんし、あらゆる仕事を実際、私個人で済ませねばなりません。そのことが当然、少なからぬ躊躇の原因となります。ですから前もって、あなたの了解をお願いする次第です。」

「カネッティをドイツで確かなものにする」ヴィリィ・ヴァイスマン出版社の戦後の試みは、この時点で --- 1950 年 8 月で --- 本当のところ既に破綻していた。『虚栄の喜劇』の僅かな発行部数は、公の反響がないも同然だった。しかし以前 Die Blendung のヴァイスマン版(1948 年)は --- その翻訳(ロンドン 1946 年、ニューヨーク 1947 年、パリ 1949 年)は、同時期イギリス、アメリカそれにフランスでセンセーションを巻き起こした小説だが --- すでに人を意気消沈させる拒絶に遭遇していた。僅かばかりの、かなり大きな評価(マックス・フォン・ブリュック、ルードルフ・ハルトゥング、ヴェルナー・ミルヒ、ハンス・ダイバーによる)も、その時は何の役にも立たなかった。「ニュルンベルク報知」(1949 年 9 月 17 日)は「普通の感じやすい読者」を持ち出した。この読者には、カネッティの小説は「ただ墮落と不自然さ」を提供するにすぎない。「外国の文学的紳士気取り屋連中は、自分たちの望むように判断するがよい。ドイツ人とドイツ国民生活の非常に具体的諸問題を持つ者にとって、この本が、何か真面目な関わりを持つことはあり得ない。」ドイツ語の「ニューヨーク州立新聞」(1949 年 4 月 30 日)も、「今日の紙不足のドイツで、このような作り物が書かれ、それが出版され得たかを、どうして人々はもっと不思議がらないのか」が解らなかった。「ドイツ新聞」(1949 年 11 月 26 日)はこう判定した。「どうしてマッチ棒から出来たケルンドームが、本来建設されねばならないのか? 目標と手段と消費された努力の不均衡が、主な印象として残る。」レーゲンスブルクの国営図書館局が、解決策を伝えた。「我々の受け持つ図書室、その目標は、生活の困難さに対し読者にその援助と埋め合わせとなる書物を手に取らせることだが、そこでは、我々はこのような墮落的で、おまけに大したこともない作り物の提供を警戒するだろう。」語彙が親しすぎる響きを持つだけで、文字通り昨日のものだった。しかし、地方的でない雑誌も分裂した反応を見せた。「フランクフルト・ノート」(1951 年 1 月)で、クリスチアン・フェ

ルバーは Die Blendung を、なるほど「優れた息詰まる」「楽しくて滑稽な」ものだと思ったが、しかし「見せしめの有名さで際だつ小説」を、「徹底して神に疎遠な象徴」とも見なした。「ここには最も真面目な抗議があるが、人はこの模範的に組み立てられ、自分自身で生きている作品に対し、抗議を申し立てることが出来よう。というのも、超越性が欠けており、創造者と創作物の間の関係については、どこにも言及されていないからである。」ある「小さな悲しい補説」は、出版社に命中した。出版者は「その間、成人やミドルティーンのための、一種の小絵本制作に一層多くの力を集中していた」。意味していたのは、ヌード写真入りの鞆と、ミュンヘン・マガジン出版の無邪気で面白い「新マガジン」号だった。このマガジンで、ヴァイスマンは文学的出版を財政的に保護していたが、その間「新マガジン」印刷所のボイコットにより、見切りを付けねばならなくなっていた。ヴァイスマンはこの書評を、他の書評と一緒に詩人に送付して、次のようにコメントした。

「フランクフルト・ノートすら、かくもひどく水準を下げ、論陣を張ることそれ自体が既に悲しいことに思えます。しかし多分、そのすべてに政治的背景があるのでしょう。といたしますのも、私はアデナウアーへの呼びかけに共に署名しました。東ドイツ政府との対話を始めるよう、彼に要求するアピールです。」(Weismann an Canetti, ミュンヘン、1951年1月29日)

Die Blendung をよい紙で新たに発行するというヴァイスマンの計画は、もはや実現されることはなかった。出版者によって計画された「詩人の自己証言」著作集参加の招待を、カネッティは拒否した。「そこでは、非常に深くて根本的事柄が問題です。私の仕事と私の道のりはとても困難ですから、実際、私はただ私自身のために語れるにすぎません。(…) あなたは私の作品の二・三をご存じですから、私の立場を理解なさるのは難しくないでしょう。これは、私自身が文庫版本を喜んでいることを、何ら変えるものではありません」(1952年2月25日)。

1953年、カネッティは数週間の予定でミュンヘンへやって来た。ルードルフ・ハルトゥングとの最初の個人的出会いは、親密な友情の基礎になった。書籍見本市のため、ちょうどフランクフルトへ出発しようとしていたヴァイスマンとの短い会話は、最終的性格を持っていた。出版社に宛てたカネッティの最後の手紙は、この終結を明らかにした。

「(…) ロンドンへ戻って以来、私は専ら、また非常に集中して、装いを新たに「群衆と権力試論」の徹底的研究に打ち込みました。(…)

私は多くの、また非常に良心的熟慮の後、その本をこの形式では出版できないという結果に達しました。私はどのような誤解も許さない、ある程度の明晰さを達成したいのです。そしてこのことは、完全に新しい思考の道程においては、徹頭徹尾容易いことではありません。ですから、その原稿は1954年の年間で、手元に留めて置かねばならぬでしょう。幾つかの新たな難しい章を書かねばなりませんし、他の章もはめ込まなけ

ればなりません。この材料の途轍もない多層性を知っている者だけが、それがいかに難しく、それがどれほど多くの仕事を要求するかを理解出来ます。--- 私はドイツから戻って以来、この作品のために、さまざまの問い合わせを受け取りましたが、まだそれに返答していません。それというのも、私が何をしているかの噂が広まっているようですから。私はこの本の運命に関して心配はしていません。(…)

この先二つの小説の公刊については、現在どんな方法でも、私は関心がありません。それらは、若干の変更を行いたいと考えてもいますから、決して心理学の前に出版されることはないでしょう。今のところ出版は、およそ3年経過しない前にはないことを意味します。私は、小説または私の作品中の何かほかの作品に対する選択権は、誰にも与えていませんし、更にこれから先もそうする考えはありません。私はただ Die Blendung を、再び手にしたいということしか関心はありません。それが、あなたとの会話であなたにお尋ねしたかった主要なことです。しかしあなたは、高い費用の所為でその発行は出来ないとおっしゃいました。それは当然ながら大変残念なことです。私は私の戯曲のために、出版者も見つけないと思っています。戯曲はただ一つだけ出版されましたが。私には『喜劇』の他に、書き終えた4つのドラマがあります。そして今年中に、もうほとんど何の変更も必要としないものが、更に一つ付け加わるでしょう。

私自身は、私の作品中の何か一つの作品を、何かある出版社に提供することを好みません。私はそのことを今までずっと保持してきました。私の作品に関心がある者は、自ら私に向かうべきです。私にとって非常に重要なものを行商して歩くのは、私の誇りをひどく傷つけるでしょう。人は、その当人の第二の性質となった態度のために、最大の犠牲を払い、それから突然、どのような理由もなく、その態度を変えることは出来ません。」(Canetti an Weismann, ロンドン, 1954年1月13日)

「群衆と権力」は漸く1960年、ハンブルクのクラッセンで出版された。幾つかの戯曲が1964年、ミュンヘンのハンザーで続いた。それからカネッティの作品は自ら展開をとげた。作品と共に彼の名声も。カネッティを長きに渡り避けていたこの名声について、彼は予感的に書いた。「名声は売り物であるが、しかしほんの一瞬にすぎない。永続的な名声は計算しようがない。そしてこのことが、名声で贖う唯一のことがらである。」そして「本来あらゆる名声はめまいである。めまいのときには時折り、やはり名声の背後に何かがあるのが明らかになる。何という驚きだろう！」